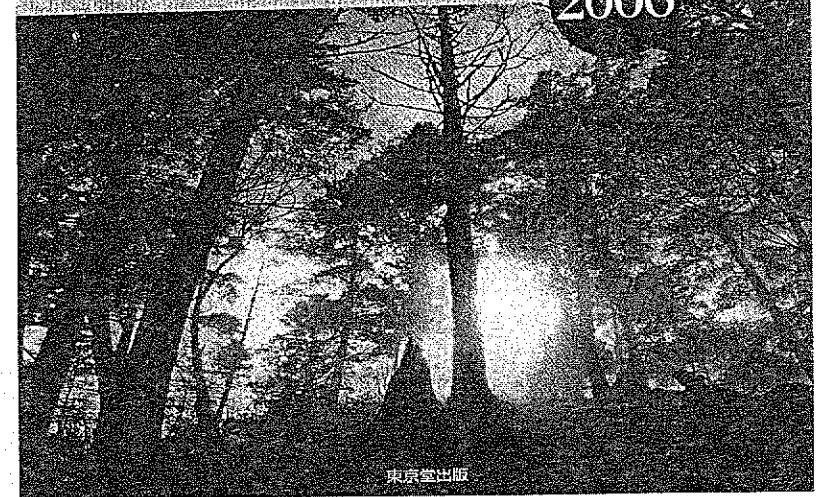


現代宗教

国際宗教研究所(編)

2006



東京堂出版

『現代宗教 2006 特集慰靈と追悼』 pp. 51-75 国際宗教研究所(編)
東京：東京堂出版 2006年 ISBN4-490-30639-3

慰靈と追悼

特集 慰靈と追悼

「戦後」台湾における慰靈と追悼の課題 —日本との関連について

黄 智慧

こう ちえ

はじめに

台湾という島は九州ほどの面積だが、多民族より構成される民主国家である。とりわけここ二〇年で急激な民主化が進むに連れ、大きく分けて四つの民族・文化集団に集約し得るという社会的コンセンサスが形成されつつある。⁽¹⁾第一に、台湾では「原住民族」と称するオーストロネシア系の言語を用いる先住民諸族、次に客家語を用いる客家人、閩南語を用いる鶴佬⁽²⁾（福佬）人、そして戦後になつて中国大陸の各地から移入してきた、一般に外省人といわれる北京語を主に用いるグループである。

その中でも原住民諸族および客人に対する文化の

衰退に瀕しているという危機感から、近年、国家によつて保護および文化振興の措置が採られてきた。⁽³⁾二〇〇五年には民族言語による教育システムが完備されたうえ、それぞれ専属のテレビチャンネルが登場し、民族言語による番組を終日放送するようになつた。⁽⁴⁾一方で鶴佬人は人數的に最も多いマジョリティではあるが、文化政策で長く抑圧されてきたため、民主化のもとでその憂さを晴らすように「台語」を堂々と誇るようになつた。⁽⁵⁾以上三者のはずれもが競つて民族への帰属意識を高揚させ、積極的に地域活性化にも取り組んでいる。

こういった活発な民族文化の復権運動は、戦後長く文化・教育政策の主導権を握ってきた外省人の抱く中華文

化と微妙な競争関係にある。現に台湾社会はいま、各民族集団の共存・共榮の道を模索している情況にある。

そのため、台湾社会における慰靈と追悼を考える際、

一言で表現するのはほとんど不可能である。「慰靈と追悼」というテーマは、宗教の次元で語られるのが一般的であるが、それぞれの民族集団の精神文化の根底に直接触れるものもある。同時に、政治的現実と絡んでくるという点においても、宗教の次元を超えてくる。台湾における「慰靈と追悼」というテーマは、まさに民族、宗教、政治の三つの領域の行き交うところにあるいえよう。

もつとも台湾は国教を持つておらず、厳しい政教分離政策も取っていない。それどころか議員や政治家が公務中に宗教的な場に登場し、信者ではなくても、儀式に参加することがある。今までの總統の中で、特に李登輝が個人的には敬虔なクリスチヤンであるが、他の宗教に対して非常に寛容であった。例えば戒嚴令時代に邪教という汚名を着せられた一贯道やいくつかのキリスト教系新興教団は再び目の目を見るようになった。そして今の陳水扁總統は鶴佬系の出身であり、その民族の宗教的寛容

さに染まっている。しかしこうした宗教的に寛容な社会的雰囲気の中で、国として処理できない慰靈と追悼の課題が未だに厳然と残っている。

拙論では、まず原住民族および客家人、鶴佬人の慰靈と追悼の観念について考察し、さらに国の慰靈・追悼の関連施設について検討を加え、最後に太平洋戦争の慰靈と追悼という課題に焦点を絞りたい。そうした検討作業をするうちに、日本とこの課題との関わりがいかに錯綜しているかがおのずと浮かび上がってくるであろう。

一、原住民諸族の祖靈信仰

台湾の原住民族は現在総人口約四六万人、元来九つの民族が政府により認定されていたが、二一世紀に入つて

(一) タイヤル族

からは認定された民族⁽⁵⁾の数は一二に増えた。とは言つても、実際、各民族はサブグループにまた更に分けられ、言語だけでも四〇種類に細分化されている。そして国から認定を得ようと努力中のエヌニシティも存在する。それだけ、彼らは昔から自給自足の部族社会において実際に多種多様な文化様式を築き上げてきたと言える。その宗

教生活は概して言えば、神や祖靈を畏れ崇めるアニミズム的観念のもと、祖靈祭祀と農耕儀式を行うことである。そして、社会秩序を維持する捷として禁忌を重んじている。二〇世紀の後半からキリスト教が急速に普及し始めたが、地域や部族間の差もあり、伝統的な宗教観念は依然として根強く人々の心に残っている。また、近年、民族の復権運動とともに、衰えていた祭が復活されるなど、伝統的な宗教観念も見直されている。

ここでは一二民族の中から例として三民族を取りあげてみたい。まずは台湾北部と中部の山間地に住む人口約九万五〇〇〇人のタイヤル族の事例から考えていただきたい。

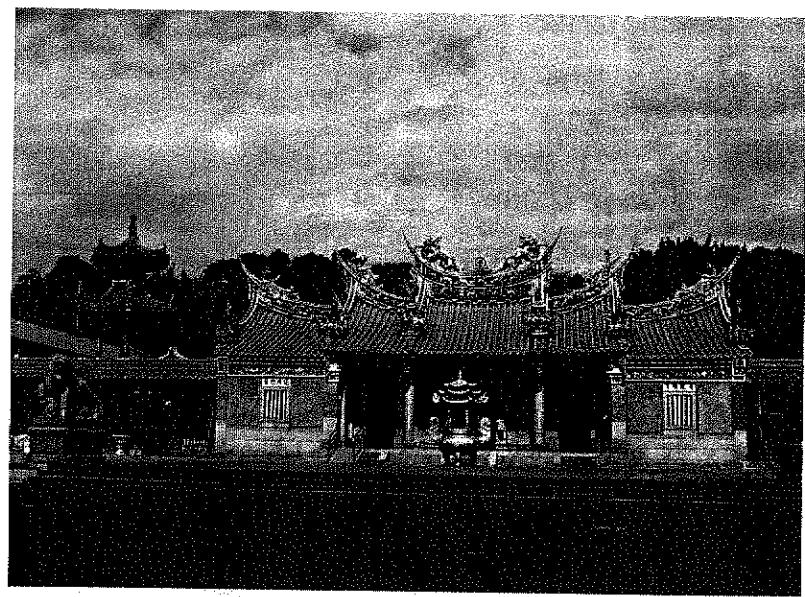


写真1　客家人の信仰の中心である新竹新埔・褒忠義民廟

く肉体を離れて虹の橋を通つて靈界である「トツハン」(Tuxan)へと至り、祖先と再会するという。顔の上に刺青がない者、生前に罪を犯した者、または非業の死を遂げた者は、この虹の橋を渡れず、祖先に会うことはできないと考えられている。靈界に辿りつくことのできた善靈は子孫を庇護し、儀式中に呼びかけるとすぐやつてくれる。これに対して靈界に辿りつくことのできない靈は悪靈となり、村の外をさまよい歩き、林野の中で人々に危害を加えるという。

この種の靈における善惡の区別はまた、埋葬の習俗にも反映されている。タイヤル族は死者を良い死に方をした者（家中で人に看取られて死んだ者）と、変死者（村の外で人に付き添われることなく、殺害されたり事故死した者、あるいは非業の死を遂げた者）の二種類に区別する。前者は家の内の床板の下に埋めることができる。いわゆる屋内葬である。後者は死体を死の現場に埋め、身についた衣服あるいは道具もまたその地に遺棄せねばならず、かけつして家に持ち帰つてはならない。その後、村人はその場所へ来ることはなく、開墾もしてはならない。変死

者が崇りをなすことを恐れるがゆえである。戦死者については、彼らは死体を敵の中に残しておくのは屈辱と考えるため、できるだけ死体を取り戻そうとするが、村の中に持ち込むことはできない。必ず村の外の原始林または荒野の中に簡素に埋葬するか、あるいは埋葬さえもない。死者の用いた刀、槍、衣服は全てそばに遺棄する。その後はその場所を避け、二度と通ることはない。

タイヤル族は基本的に粟の農耕儀礼を行う。粟を収穫した時は、必ず先に祖靈（オットフ）へと捧げ、彼らの庇護によって収穫を得たことに感謝する。年中行事の収穫祭ではあるが、村全体で行うのではなく家族集団が各々行い、祖靈を呼び招き新穀を供えるため、祖靈祭といわれることもある。このほかに死者を慰靈したり追悼したりする概念や儀式は特に存在しない。戦死者については特にそうである。しかし、祖靈祭の時に、目や手足のない「オットフ」もどうぞ来てください、という祝詞を唱えるという点から、変死者にも供物を振舞つているといえるだろう。現在キリスト教による告別礼拝式が一般的であるが、やはり死に方によつて棺を教会の中に置

くかどうかが区別されている。

(2) パイワン族
次は南部の山に住む人口約七万七〇〇〇人のパイワン族の事例を取り上げたい。

パイワン族は、村の頭目が個人の実力によって決定されるタイヤル族と対照的であり、貴族と平民に分かれる階級制度を発展させてきた。その頭目の地位と家屋は世襲制度に基づき、男女を問わず、長子により継承される。彼らの宗教生活は非常に豊富で、膨大な神話体系と祝詞が言い伝えられている。また、年中行事の種類も多様かつ繁雑であり、専門の祭司（巫女）と頭目によつて支えられている。その宗教観念の中で、最も重要なのは「ツエマス」(Tsomas) という神概念であり、それがさす範囲は最高位の創造神からあらゆる天上の善神、さらに悪神惡靈にいたるまで含まれる。八百万の神々が存在する世界は多くの階層から成り立つている。上から順に最上階である神界、その次に天界、人界、中界、冥界、下界、というように構成されている。

人の死後の靈魂には善靈と惡靈の区別があるが、それは生前の行いの善惡によつて決定されるわけではなく、死の原因によつて決定されるのである。およそ家中で死亡した者は、自殺や難産で死んだ者を除いてみな良い死とされ、善靈となる。死後、魂は人間界を離れ、先に中界に行き着いてしばらく住み、まず蛇になる。その後、創造主の決定により、少數の魂は第二層の天界へと昇ることができる。その他の大部分は冥界へと赴く。この冥界と人界は平行して同一階層に存在し、上下の区別はない。なお、これらの善靈は祖先の発祥地とされている屏東の大武山へと戻るという言い伝えもある。家の外で死亡したものは、死因が事故であれ戦争であれ、どれもみな惡靈となり、その存在する位置も下界と呼ばれる。

ただしタイヤル族と異なるのは、パイワン族の変死者は、祭司が特別な儀式を行うことによつて善靈になりうるという点である。巫女達が呪文を唱え、その魂のために祈ることによつて、魂を善靈のいる冥界へと送ることができる。そもそもなければ、その靈は安住の場所がないため、人間に危害を加えるという。埋葬の際にも戦死者の

死体は取り戻すが、村の中に入れず、外に葬る。

パイワン族は原住民族の中で、もつとも盛大な祖靈を迎える祭りを執り行う。五年に一度、祖先たちが大武山から降りてきて、村を巡視すると考えられているので、「五年祭」ともいわれる。⁽⁸⁾ 村中挙げてのこの祭りでは、盛大なる踊りや竹竿によつて球を刺す特別な儀礼も行われる。半月にもわたる繁雑な儀式を要する「五年祭」は、供え物をして善靈、惡靈の両方を送迎する。その中には、以前、儀礼によつて善靈となつた戦死者の靈も含まれる。

(3) ヤミ族

三番目に人口わずか三〇〇〇人程の、台湾の東南海上に浮かぶ蘭嶼島に住むヤミ族を取り上げたい。

ヤミ族は台湾原住民諸族の中でもとりわけ死者の靈を恐れる民族である。普通の死や変死のような死に方の区別もなく、見知らぬ他人であろうと近親であろうと、人が一旦死ぬとすべてが「アニト」(Anito)になり、現世の人に害を与える存在であると考えられている。特に近親こそ、生前に大事にされなかつた怨みや現世の人の裕

写真を見ることさえも禁忌とされる。

したがつてヤミ族が祖靈祭を行うことはない。また、今まで小さな島に住む六つの村同士は平和を保ちお互い戦争したという伝承はない。男子のよろい、武器は重要な儀式（特に船おろし、家屋の落成式）にかかせない、「アニト」が妨害に来るのを防ぐための道具なのである。

なお、上述した三つの民族の中、タイヤル族とパイワン族は部落戦争の経験があり、太平洋戦争時には日本軍として南洋で戦つた。いわゆる「高砂義勇隊」である。ヤミ族は三〇人ほどが台東沿岸を警備するのに召集されたが、南洋戦線には赴かなかつた。また、一九世紀末より原住民族のいくつかの部族は日本の征服戦争に遭い、帰順せざるを得なかつた。当時の歴史については、彼らは文字を持っていなかつたため日本軍の記録しか残っていない。近年、こうした問題に関する研究が徐々に始まつている。

二、客家人の義民信仰

四〇〇万人の人口を有するとされる客家系エスニシティ

福さを妬み、生前の家族の弱みをよく知つてゐるという点で、もつとも警戒すべき「アニト」になる。

そのため、家族が一旦息を引き取ると、葬送は男子のみで行う。皆「アニト」に対抗するため藤製の笠、よろいを纏い、矛と刀で武装して、海辺にある村の外の墓場まで死者を送る。死者が通つた道は竹で囲つて隔離する。埋葬後は刀や矛などの武器で「アニト」を追い払い、村へ帰つて来ないよう武器を振り回す。そして目を大きく見開いて睨みつけ、奇声を発して「アニト」を威嚇する。特に夜間は死者の家の周りや墓場の近くで武器や石灰、糞便などを使って、夜が明けるまで徹夜で「アニト」を追い払う。

一方、死者の妻や子どもは号泣し、死者の生前の業績を村人たちに大声で訴え、村人たちは去つたばかりの死者に尊敬の意を表し、一、二日間は外出もせず仕事も完全に休む。しかし、三日以内に葬儀を終え、その後は死者との関係を絶つため、死者が生前使つたものを川か海辺に捨て、二度とこの家に戻つてこないように死者に祈願する。また、会話中に死者の名前を出したり、死者の

イの台湾における分布は、かなり広範囲にわたる。西北部の桃園・新竹・苗栗が最も多く、続いて南部の高雄・屏東地域の六堆地区に多い。その後人口の増加に伴い中部の東勢・国姓・埔里一帯および東部の宜蘭・花蓮・台東にも移民している。いずれも沿岸部や平野部ではなく、山に近い丘陵地を開墾して集落を形成している。中央山脉の原住民族の居住地に近接しているため、原住民による首狩りの危険に常に晒されていた。そのため客家人は三〇〇年来の移民開墾の過程において多数者である鶴佬人とテリトリリーの小競り合いをしながら、平埔族や原住民との連携を図るなど、巧みにエスニシティ間の関係を処理してきた。

異民族に四方を囲まれていた彼らは、大陸の廣東や福建南部から持ち込んだ伝統的な大宗族制にこだわり続けた。客家の多くは祖先の位牌を各自の家の中で祭る鶴佬人と違つて、宗族一同の位牌をまとめて「祠堂」に置き、先祖を祭る。毎年祖先の祭祀や墓参りなどの行事に参加する者は数百人にも上る。宗族の集まりでは、老若の順に従い、儒教的な忠孝節義の倫理道德を子孫に伝える。

生計においては、大部分が農民であるが、学業を修め、公職や教職につくよう子弟を励ます。

こうした価値観をよく表しているのは、義民信仰である。新竹の新埔地方にある褒忠義民廟は、北部客家の信仰の中心となっている。周囲にある一五の大庄という祭祀組織が順番に主催して毎年春秋に祭典を行なうほか、旧暦七月十五日の中元節から二〇日まで、体重が一〇〇〇キロ近くもある大豚の犠牲をささげ、盛大な儀式を行い、孤魂を慰める。

ここに義民の起源は一七八六年清の乾隆帝時代に、台中の林爽文という豪族が南投・彰化・嘉義までに及ぶ規模の大きい反乱を起こし、新竹城を攻め落とした時にさかのぼる。その時、新竹の客家人と平埔族であるタオカス族が協力し、村人たちを組織して反乱軍に抵抗した結果、二〇〇人余りの戦死者を出した。一七八八年、政府軍によつて反乱が平定された後、これらの遺体が合同で埋葬され、義民塚と呼ばれるようになった。そして一七九〇年乾隆帝から「褒忠」の勅旨を賜ることにより、褒忠義民の廟が建てられたのである。もつとも、これ以前

から清政府は台湾の民衆反乱事件が起きたたびに、正規軍の不足を補うため、現地の豪勇を集め軍に充てた。政府の側に立つて戦つたその人たちを「義民」と呼んでいたのである。さらに七〇年後、中部の彰化で戴潮春による反乱事件が起きた際、新竹でも再び義民軍が組織された。今度は一〇〇人余りが戦死したので、もとの義民塚の横に新たに塚が作られ遺骨が納められた。その後、戦死した義民それぞれの位牌が作られ、廟の中に祭られることがなつた。

そして乾隆帝以後、歴代の皇帝から横額を賜り、日本統治時代には一度当局に廃廟される危機に瀕したが、日本まで陳情に行って廟の存続を得たという。一九四一年に拓務大臣・秋田清からは「忠魂不朽」、台湾總督・長谷川清からも「盡忠報國」の横額が贈られ、今でも掲げられている。戦後には蔣經国、李登輝、そして今の陳水扁總統からも横額が贈られる伝統が続いている。

とは言つても、これらの政府からの横額は信仰の中心ではない。やはり「義民爺」として親しまれる先祖の守護があると考えられているからこそ、信仰が盛んなのである。

ある。戦死者の子孫たちは今でも繁栄しており、毎年行われる義民信仰特有の祭祀では生きている家族と同じように先祖に一般的な食事を供える「奉飯」（特にゴマ油と酒で煮込んだ鶏肉スープがよく捧げられる）を行う。このような「奉飯」儀礼は地方によつては1ヶ月にも及ぶ。

義民爺はご先祖様として子孫に繁栄と幸福がもたらされるよう守護してくれるといふ。また、義民廟では義民中学校を創設して、子弟の教育に力を入れている。

義民爺の靈験のあらたかさも客家人の信奉の要因である。郷土を守る神威が強調され、開墾時に疫病や虫害、異民族との紛争などに遭うと、人々は義民爺の靈威に頼る。そうした義民信仰は新竹から始まつものではあるが、客家人の移動とともに台湾全土に広がり、現在は義民爺を祭る三四の廟があり、中に鶴佬人の信者もいる。

義民の子孫を中心とする祭祀組織も次第に拡大し、新竹・新埔の祭祀組織は二五〇近くもの村を含み、桃園・平鎮の組織も一〇〇余りの村を有する。近年、客家の文化振興運動においては「義民精神」⁽¹⁰⁾がよく強調され、客家人の精神のよりどころとなつてゐる。

三、孤魂を憐れむ鶴佬人の醜儀

人口一五〇〇万を有する台湾最大のエスニックグループである鶴佬系の住民は、基本的に道教をベースに仏教や儒教および各職業の神などを加えた「民間信仰」という複合的な宗教的生活を送る。神を擬人化した像を廟の中心の祭壇で祭るという形態を取つてゐるが、神の種類は王爺・媽祖⁽¹¹⁾・觀音菩薩・土地公・釈迦佛・玄天上帝・閻聖帝君・保生大帝など三〇〇種に近く、おびただしい数である。

その中には、開墾時代に大陸から持ち込んだ鶴佬人独自の守護神である開漳聖王と青山王がある。しかしあずれも長い歴史の中で、台湾の特色を醸し出し、しかも工スニシティの境界線を越えて客家の信者も獲得してゐる王爺・媽祖・土地公の繁盛には及ばない。また、家では祖先に対して「公媽」と呼びかけ、どの家にも神を祀る神桌の上に祖先の位牌を置く神壇が必ずある。宗族共同の「祠堂」もあるが、鶴佬系は広く台湾各地に分布しているため、年一度の清明節の墓参りの外は、各自の家で

祀るのが一般的となつた。

一方、家で十分な祭祀を受けていない、いわゆる孤魂は、恐れ崇める存在であり、またもつとも憐れむ存在でもある。孤魂の祀り方は三つある。一つ目は台湾の各地によく見られる万善祠で、無縁仏（万應公、有應公、百姓公と呼ばれる）を祀る祠である。これらの祠は誰にも祀られない靈を哀れみ、民衆により自発的に作られたものである。無縁仏の遺骨を集め祠を作ることは、功德を積むことに等しいとされる。二つ目は毎年旧暦七月の一ヶ月間、冥界の扉が開き、孤魂がこの世にやつてきて人間からもてなしを受ける。このような孤魂の魂は「鬼」とも呼ばれるが、日本の鬼の概念と異なり、個人的な理由で異常な死に方をした靈のことを指す。この期間中は結婚や引越しは縁起が悪いため行われない。また、海辺に行くことも同様に避けられる。そして、仏教の施餓鬼の概念も混じって、特に「七月半」あるいは「中元節」とも呼ばれる日に盛大な布施が行われる。

三つ目は、戦争あるいは疫病の発生などによつて大量の死者が出た場合、廟を中心に行われる醮儀である。

を行つたのは七〇〇年も経つた一九八七年であつた。また一九九九年九月二一日に大地震が起こつた台湾中部の埔里鎮では、翌々年一〇〇以上の廟が神の違いに関係なく、媽祖廟を中心として共同で「祈安醮」を開催し、その地区の千人に上る地震による犠牲者の慰靈が行われた。

そのほか、定期的に醮儀を行う王爺廟もある。台南の西港、屏東の東港は三年に一度、疫病神を送つて死者を慰めるため、供物を満載した「王船」を燃やしつゝ儀式が三〇〇年近くも途切れることなく行われており、この地方で最大の行事となつてゐる。その間の儀式で使われる金額は、ざつと数億円に達する。特に醮儀の終盤の普度の儀礼は、過度な消費、蕩尽、といわれるほどで、人々は惜しげなく孤魂に見世物を披露し、できるだけ多くのご馳走を供えるのである。例えば二〇〇五年に二八年ぶりに台南の学甲鎮の慈濟宮で行われた醮儀の普度では、広場に華麗な祭壇が建てられ、信者による供物を並べたテーブルが一二五〇〇卓も用意され、一七〇〇頭の豚が屠^屠られ供えられ、熱氣あふれた農村社会の底力を見せていた。

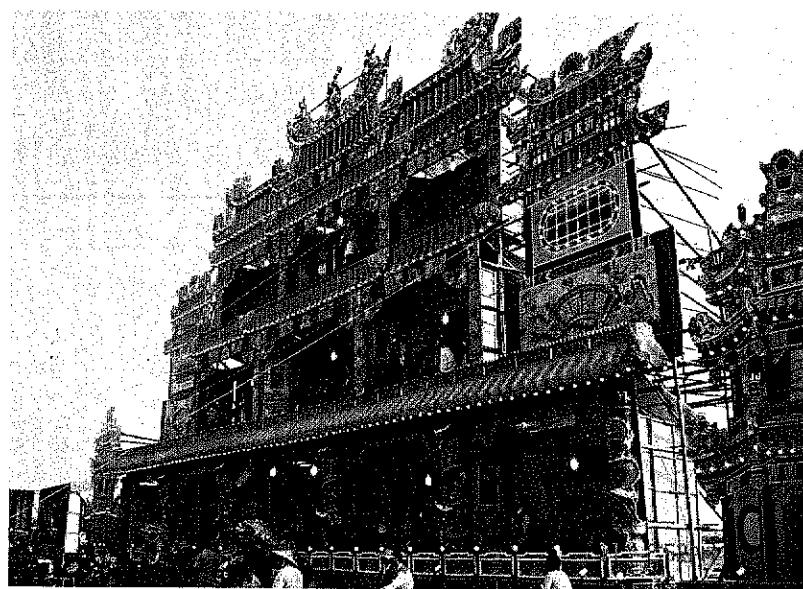


写真2 台南で行われた醮儀の普度儀式の祭壇

「醮」は中国古代の道教を起源とするが、台湾では道士を中心にさまざまな民間祭典の複合体として変容してきた。現在では、ある地域社会がかけた願の願ほどのために行う地域総動員の大規模な祭典であるが、廟の落成や修繕後、神に感謝をささげる「慶成醮」や国家・地方の安泰を祈る「祈安醮」、疫病を払う「瘟醮」がよく見られる。また王爺、媽祖、保生大帝など祭祀される神に關係なく、廟が合同して行う場合もあり、いずれの醮儀も、竹竿を立てて、神および孤魂を召喚するところから一連の儀式に入り、そして孤魂をあの世へ往生できるよう普度を行う儀礼をもつてクライマックスを迎える。中でも「祈安醮」では、災いを鎮めるよう護国英靈を慰め祀るのも祈願の目的となる。またある特定の事件の犠牲者を慰靈することもしばしばある。そうした場合、時間の経過は関係ない。例えば一九一三～一五年に起きた日本統治時代の最後の漢民族による武装反乱事件である余清芳事件は、政府軍に鎮圧され、台南の玉井・南化地方の犠牲者の数は一〇〇〇名に上るという。しかし犠牲者を慰靈するため当地の三七の廟が合同で「祈安醮」

そのような普度の儀礼は、個人や主催する村落の威信競争にもつながるが、しかしその中に台湾人が誰にも祀られない孤魂に対して持つてゐる心からの憐れみを垣間見ることができる。普度儀式が終わると、供えていた食物を下げて、親戚や友人、知り合い、さらには知り合いの知り合いをも招いて饗宴を開く。よそ者を暖かく迎えるという、その大盤振舞いの情熱ぶりからも鶴佬人の人情味の原点が窺える。⁽¹⁾

四、中華民国史観により主導される忠烈祠

さて、上述のエスニシティ集団のほかに、台湾には三五〇万人ほどの外省人と呼ばれる人々が、主に大都市あるいは軍事基地の近くに居住し、多くは軍人・公務員・教員になっている。すでに台湾に来てから六〇年近くになるが、近年原住民、客家、鶴佬人との通婚も多くなり、二世、三世が生まれ、台湾に新しい文化的活力を注入しつつ定住してきた。一九九八年には前總統李登輝から彼らに対して「新台灣人」という称号が贈られた。大陸の様々な土地の出身である彼らは、宗教生活の面において

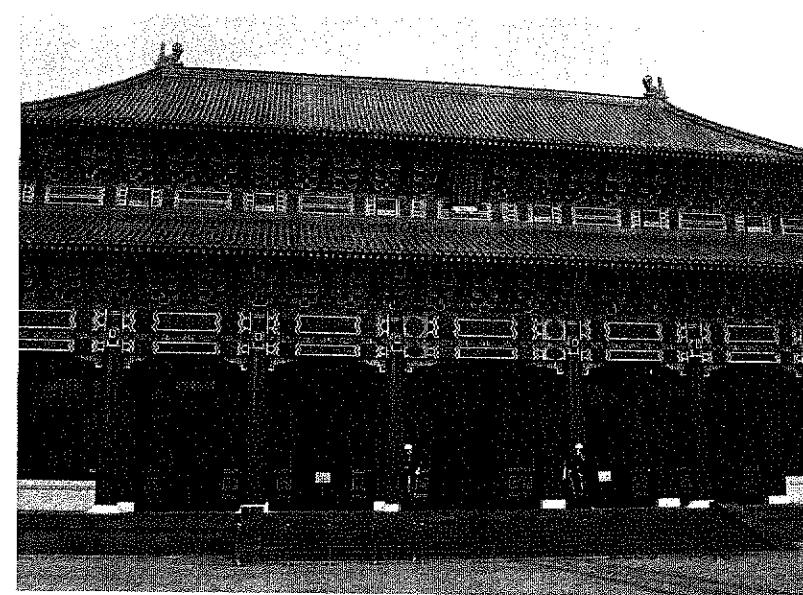


写真3 戰前の台湾護国神社跡地に建てられた国民革命忠烈祠

元来多様であるはずだが、国共内戦終了後、軍隊とともに台湾に撤退・避難してきたため、台湾には先祖の墓はない、家で位牌を立てて先祖を祀ることも極めて少ない。まだ、台湾の地域社会の廟を中心とした民間信仰に溶け込めず、無宗教者が多いが、キリスト教や仏教教団に参入する人もいる。

ただし外省人は大陸の居住地に宗族あるいは先祖の墓があるため、三八年にわたった戒嚴令が解除された一九八七年以降大陸に帰り墓参りをする人が跡を絶たない。最近、元中国国民党主席連戰、国民党主席宋楚瑜が中国を訪れた時も、真っ先に祖先の墓参りをしたのであった。また彼らを率いて中国大陆から撤退してきた中華民国政府は、台湾において「国民革命忠烈祠」という國の慰靈施設を作り、大陸での戦没者の位牌を祀つてゐるが、その関係者および遺族もほとんど外省人である。

満州事変以降、当時大陸にあつた中華民国は大陸時代から戦死者を「烈士」として手厚く祀つてその名譽を讃える措置を取りはじめた。一九四〇年代に日中戦争が次第に拡大し、多数の死者が出るようになると、各地で

「烈士祠」あるいは「忠烈祠」を作るよう法令が出された。一九四五年には中国大陆の各地で地域の關帝の祠を改造して七六六か所の「烈士祠」が作られ、戦没者は位牌をもつて供養された。しかし、戦火の下、財政難のため「首都忠烈祠」という計画は実行できなかつた。政府機関が台湾へ遷移した後、まず台北市の大直にある戦前日本が作つた台湾護国神社を利用し、祭神を烈士の位牌に換え、「台湾省忠烈祠」とした。さらにここは一九六九年、故蒋介石總統の指示により日本式の木造建築から莊嚴華麗な中國の宮殿作りに改造され、「国民革命忠烈祠」と改称された。そして台湾各地方にある日本統治時代の神社も地方の忠烈祠として次々に改造・改称され、「国民革命忠烈祠」は最高位の忠烈祠として位置づけられることになった。⁽²⁾

「国民革命忠烈祠」の祭典は毎年春季（三月二十九日）と秋季（九月三日）に行われるが、概して宗教的色彩は少ない。ただし政府代表と遺族、学生以外の一般民衆の参列は許されていない。中央の本殿には「国民革命烈士の靈位」という大きな位牌が鎮座しており、總統が自ら主

祭を司る。本殿の左右は文烈士祠と武烈士祠とに分かれている。文烈士祠の式典は内政大臣が主祭し、文官の五院院長（行政・立法・司法・考試、監察）の官員が参列する。文烈士の位牌は殉死時期の順に並べられ、五つに分けられている。

(二) 開國烈士（一八九五—一九一〇年）。辛亥革命前

の広州蜂起の最初の犠牲者である陸皓東、方声洞、秋瑾、林覺民などの烈士。

(三) 討袁烈士（一九一五—一九一六年）。袁世凱討伐による烈士。

(四) 護法烈士（一九一六—一九二三年）。張勲の清朝復古の討伐による烈士。

(五) 抗日烈士（一八九五—一九四五年）。台湾で日本に抵抗した者。

(六) 戰乱復国烈士（一九四五—現在）。国共内戦から現在までの戦死者。

武烈士祠の式典は国防大臣が主祭し、将校や軍位の高い人が参列する。武烈士祠も殉死時期の順に並べられる。将官は個人位牌、佐官・尉官は百人単位の位牌、兵

士は供養箱の中に納められた名簿により祀られている。

また、殉死の時期によつて六つに区分されている。

(二) 東征烈士（一九二五年）。蒋介石による黄埔軍設立翌年の戦役における戦死者。

(三) 北伐烈士（一九二六—一九二八年）。北洋軍閥の討伐における戦死者。

(四) 討逆烈士（一九三〇—一九三五）。共産党との戦いにおける戦死者。

(五) 戰乱復国烈士（一九四五—現在）。日中戦争に鎮圧における戦死者。

(六) 戰乱復国烈士（一九四五—現在）。国共内戦から現在までの犠牲者。

文烈士祠と武烈士祠において合計三九万人が祀られている。ただし「国民革命忠烈祠」とは言つても、各戦役を見ればわかるように、祀られているのは軍閥や共産党、国民党内部の他派等との戦闘における蒋介石派の国民党の軍隊の戦死者だけである。次に、文烈士祠の（四）台



写真4 高雄神社の跡地に建てられた高雄市忠烈祠

湾出身者の「抗日烈士」は武烈士祠の（五）日中戦争の「抗日烈士」とは全く違うといふことがわかる。一九六九年蒋介石氏の特別指示により「日清戦争開始から光復（台湾領土回復）までの抗日烈士」も祀られるようになつたのである。この指示の下、日本統治が始まつた一九世纪末の簡大獅、柯鉄、林少貓らの反抗者や一九一五年の余清芳事件の反抗者たち、一九三〇年霧社事件の首謀であるモーナ・ルダオ、および巻き込まれた花岡一郎までが祀られている。こういった人物についての解説の中には、その時代は台湾が日本に「窃盜され占拠された」と書かれている。しかし一九世纪末の台湾での反抗者たちは中華民国の国民革命が起きる前の人物であるにもかかわらず、「国民革命忠烈祠」に祀られている。また、霧社事件を起した当時のタイヤル族を中華民国の革命と関連させるのも、見る者に首を傾げさせることである。しかし逆にそういう人物が祀られていることから、中華民国の史観、ないし中国国民党の史観においては、かつて台湾が日本の領土であったことをなお認めていないことが窺われる。

ところで、「国民革命忠烈祠」は以前の台湾護国神社の跡地に建てられたものであり、神社の敷地を全て継承している。また、地方の二一の忠烈祠のうち一五箇所は日本統治時代の各種神社の跡に建てられたものであつた。

例えば官幣中社の台南神社は台南市忠烈祠となり、高雄港を見渡せる高雄の名勝地・寿山にあつたかつての高雄神社は高雄市忠烈祠となつた。

一九四二年に台湾護国神社に祀られる条件は、靖国神社の合祀者であること、台湾の陸・海軍に属していること、台湾に本籍か住所があること等だった。当時台湾護国神社の祭神には太平洋戦争中に戦死した台湾出身者がすでに含まれていたと思われる。しかし、現在の「国民革命忠烈祠」はそれらの祭神を継承しなかつた。それどころか逆に日本統治時代の政府にとつての武装反乱者たちを「抗日烈士」として祭神にしたのである。

現在、「国民革命忠烈祠」は日本人観光客がよく行く台北の観光名所となっている。観光の目玉は一時間に一度の衛兵交代式のパフォーマンスである。しかし、観光客を除いて、台湾で普段この「国民革命忠烈祠」に参拝

二つ目の「戦後」は「日中戦争」（一九三七—一九四五）の「戦後」である。日本は当時、中国大陸にあつた中華民国を侵略し、戦争の結果、日本は連合国に無条件降伏をし、中華民国は戦勝国になつた。

三つ目の「戦後」は「国共内戦」（一九四五—一九四九）の「戦後」である。中国大陆にあつた国民党は、その後中華人民共和国を建国した共产党と内戦を行つたため、中華民国は台湾に移らざるを得なくなつた。戦争状態は終結しているが、中華民国は敗戦を認めていない。

今日の台湾の人々にとっての「戦後」は、その人の経験や父親・祖父の代の歴史的経験により異なつたものとなつてゐる。戦争との関係、戦争に対する考え方、さらにはこの三つの戦争が残した処理すべき問題について、原住民・客家人・鶴佬人は「太平洋戦争」における敗者の立場にあり、一方外省人は「日中戦争」の勝者としての立場と、国共内戦における敗者としての曖昧な立場の二つの立場に立つてゐる。そのため戦後処理においてバランスを取るのは至難の業である。

この六〇年の間、上記三つの戦争の「戦後処理」に対

に行く人は少ない。その原因は、忠烈祠に挙げられている大部分の戦役と自分たちとの関係があまりにも程遠いからである。

五、三つの「戦後」と日本とのかかわり

上で分析したように、台湾では宗教観念の異なる民族間において、慰霊に対する考え方やその様式には大きな違いが見られる。また民族それぞれが関係した戦いも異なり、戦争に関する歴史体験も自ずと違つてゐる。未だに戦争が残した問題においてなお埋められない民族間の溝が存在し、そのため、「戦後処理」が相当複雑な様相を呈している。そもそも慰霊と追悼はいわゆる「戦後処理」問題の一環である。二〇〇五年は「戦後」六〇年に当たり、反省を新たにした年であるが、実は台湾では三つの「戦後」が存在している。

一つ目の「戦後」は「太平洋戦争」（一九四一—一九四五）の「戦後」である。当時台湾は日本の領土の一部であり、国家総動員体制のもと、台湾人は日本本土の国民と同じように参戦し、同じように敗戦を体験した。

して、中華民国政府は「日中戦争」と「国共内戦」の戦死者に對してのみ忠烈祠において慰霊と追悼を行つており、「行政院国軍退除役官兵輔導委員会」⁽¹³⁾という内閣行政機関が元「國軍」の兵士や遺族を世話している。その一方でこの台湾という土地における「太平洋戦争」での軍隊・民間の犠牲者に対しては、「戦後処理」を放置してきた。

「太平洋戦争」時には、台湾の本国は日本であった。戦後、日本では宗教的な面においては、台湾の戦没者を靖国神社で祀つてゐる。靖国神社では二〇〇五年一二月四日に戦後初めて、「台湾出身戦没者」に対する慰霊祭が特別に行われた。一方、実質的な面では、長年未解決のままあつた「確定債務」が、台湾の元日本兵は一二〇倍換算の額、戦没者に對しては日本円にして二〇〇万円の補償がほどこされた。それに対して台湾の元兵士が不満を表明してはいるが、二〇〇〇年三月三一日をもつて日本政府による補償事業は終了した。それに対して、台湾人が納得しているかどうかはさておき、日本政府は遅ればせながら実質的な面においても慰霊においても

「戦後処理」を一応したと言うことができる。

しかしながら、日本と最も関係の深い「日中戦争」では、被害者は精神面では中華民国政府から忠烈祠による厚い待遇を受けていたが、実質面では蒋介石が日本に対する賠償要求を放棄したため補償は得ていない。とりあえず、「徳を以つて怨みに報いる」という蒋介石を讀えて、一九七二年までは日本の政府要人が国民忠烈祠に参列していた。日本と中華民国とが正式に国交を断絶した時に、中華民国政府と外省人は日本に裏切られたような思いを抱き、「恩知らず」という怨みを抱くようになつた。また、その後、日中戦争への賠償・補償として中国には巨額のODA援助が行われたのに対し、台湾にいる数百万人の「日中戦争」の被害者は忘却されたかのように、そのメリットを受けることはできなかつた。日本は五一年間の台湾統治期に建設した公共財や、民間人の財産までがすべて中華民国政府に接收されたこともあり、その後正式な話し合いをすることもなく、日中戦争の賠償・補償を曖昧にしてきた。

だが、台湾に残された日本資産は植民統治の結果であ

いわば「植民後処理」として丁寧に対処する必要があるだろう。しかしそれが放置されているために、怨念が今なお尾を引いて残つているのである。

六、民間による太平洋戦争戦没者の慰靈と追悼

上述した複雑な事情の中でも、八万人の軍人、一二万六〇〇〇人の軍属が太平洋戦争に参戦し、三万人以上の戦死者が出たということは、台湾社会にとつてやはり相当大きな衝撃であった。その中に日本軍の一員として原住民族、客家人、鶴佬人も含まれていた。今まで中華民国政府はその慰靈と追悼を怠ってきたが、二〇〇五年一〇月末に高雄の旗津の海辺に「戦争と平和記念公園」を作成するという計画がようやく動き始めた。だが、それよりも早くから民間信仰による自発的な慰靈行動がすでに始まっていたのである。

新竹の北埔にある済化宮は第二節で取り上げた新竹の義民廟の近くにあり、やはり客家人によつて建てられた廟である。一九六一年、閔聖帝君と觀世音菩薩を主神として建立され、当初は病気が治るなど非常に靈験あらた

り、日中戦争とは別問題である。そのため、戦前の台湾に在住していた日本人の合意も得ずに民家の家財道具すら接収されて日中戦争の賠償に充てられたことは、やはり理不尽である。しかも、それらの日本資産は台湾の植民統治によって台湾人が受けた物質的・精神的なダメージに対する補償ではなく、国共内戦でやつてきた軍や難民を収容する宿舎にあてられたのである。このように考えると「戦後処理」ばかりでなく、正式な国交がないことを理由に日本が言わば「植民後処理」をも全く放置してきたことがわかる。このような「植民後処理」が関わる問題は範囲が非常に広く複雑であるが、いずれにして多くの死傷者が出了植民統治期に起こつて戦争に對しては、原則として「慰靈と追悼」が必要であろう。したがつて日本は日中戦争や太平洋戦争の「戦後処理」にとどまらず、統治初期の余清芳の反乱事件等に關係した客家人・鶴佬人への弾圧や、原住民への初期の征服戦争など（明治時代のパイワン族への台湾出兵戦役、アミ族への七脚川戦役、大正初期のタイヤル族へのタロコ征伐戦役など）における大きな物質的・精神的ダメージにも

かな廟として評判になり、繁榮を極めた。廟は次第に増築され、地蔵菩薩が祭神に加わつた。一九七九年、台湾出身の元日本兵の魂が日本に留まつており、家族に祀られず哀れな孤魂となつてゐるというシャーマンの神託があつたため、この廟の初代理事長が靖國神社を数回訪れ相談・交渉した結果、ついに一九八二年台湾出身の元日本兵士の靈を靖國神社から迎え、名簿を奉持して帰郷するに至つた。

その後、済化宮は数十名のボランティアを動員して名簿を整理し、戦死者一人一人の名前を書いた個人位牌を丁重に作つた。その位牌の数はざつと二万七〇〇〇余りに上り、済化宮の華藏殿に安置された。華藏殿にある神棚の中央に大きな位牌が一つあり、両側に鏡と刀が祀られている。もつとも横の壁には日中戦争終結時に日本が蒋介石に降伏した模様が描かれており、当局にかなり気を配つてゐる。毎年、春の清明節と秋の一〇月二十五日にそれぞれ三日間、僧侶による仏教式の慰靈祭が行われてゐる。当初、慰靈祭に来る人は戦没者の親が多かつたが、近年親の世代がいなくなり、兄弟、子女の世代がほとん

どになつてきている。濟化宮は客家人譜の歌合戦や親孝行の表彰などが行われることで知られている。それに加えてここは二万七〇〇余りの位牌をもつて太平洋戦争の戦没者を祀る台湾唯一の廟なのである。しかしそのことは戦没者の家族のみが知るだけで、あまり公にされていない。

公にされていない、というよりむしろ公にされないほうが都合がよいとでも言えるような慰靈施設が他にも二つある。二つとも太平洋戦争の戦没者の遺族および生還者の義捐金によって建立されたものである。一つは台中市の宝覚禪寺にある仏教式の施設である。宝覚禪寺は日本統治時代の一九三〇年、臨済宗の寺院として妙禪法師という台湾人の住職により創建された。それ以来、日本と密接に交流しながら台中の仏教の名所として知られるようになつた。住職が代々台湾人であるため、戦後、接收の難を免れた。一九八五年から日台双方の戦友会や遺族の努力が始まり、一九九〇年には当時の国民党主席兼中華民国總統であった李登輝が自ら「靈安故鄉」と題した慰靈碑と「和平英魂觀音亭」が完成した。以来、台湾

の各地や日本からも弔慰者が跡を絶たない。

それに続き、タイヤル族が住む台北県烏来郷にも元第一次高砂義勇隊の戦争生還者およびその遺族によつて、原住民族の高砂義勇隊のための慰靈施設が建立された。資金はやはり日本の戦友や遺族からの寄付が大きかつた。また、李登輝の「靈安故郷」という字を題した碑が建てられたが、それが完成した一九九二年は戒厳令が解除され、このよだな太平洋戦争の台湾人戦没者の慰靈施設を作るのは困難であつたであろう。経費の面は二つとも純粋な日・台の民間人からの義捐金によつており、台湾政府との交渉をする必要もなかつた。

しかし、二〇〇四年に烏来の高砂義勇隊慰靈碑を管理する会社が倒産し売り渡されたため、これらの慰靈碑も移設せざるを得ないという事態が起きた。二〇〇六年二月八日に移設・落成した烏来の高砂義勇隊慰靈碑はまさに日本の民間人の努力の賜物である。日本の新聞で募金を募るや、民間より移設の経費が自発的に寄付された。個々の金額がどれほどかはさておき、わずか三ヶ月間で

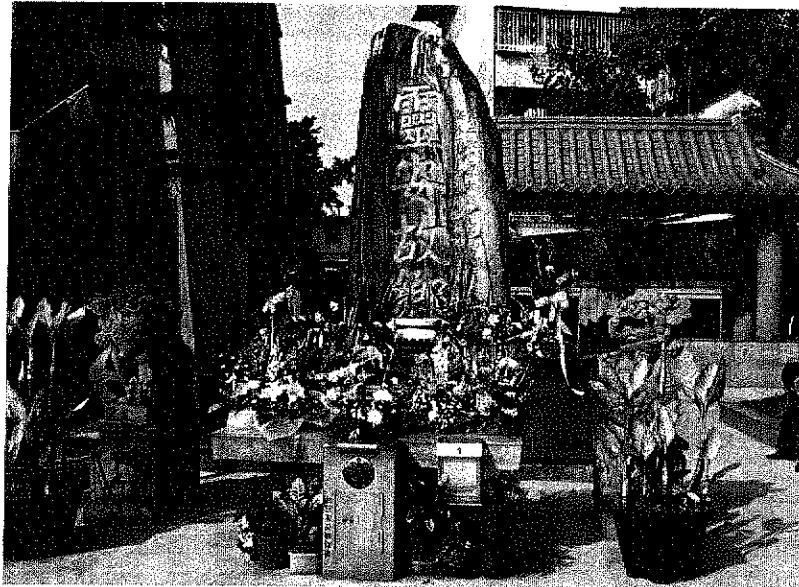


写真5 台中・宝覚禪寺の第二次世界大戦慰靈施設

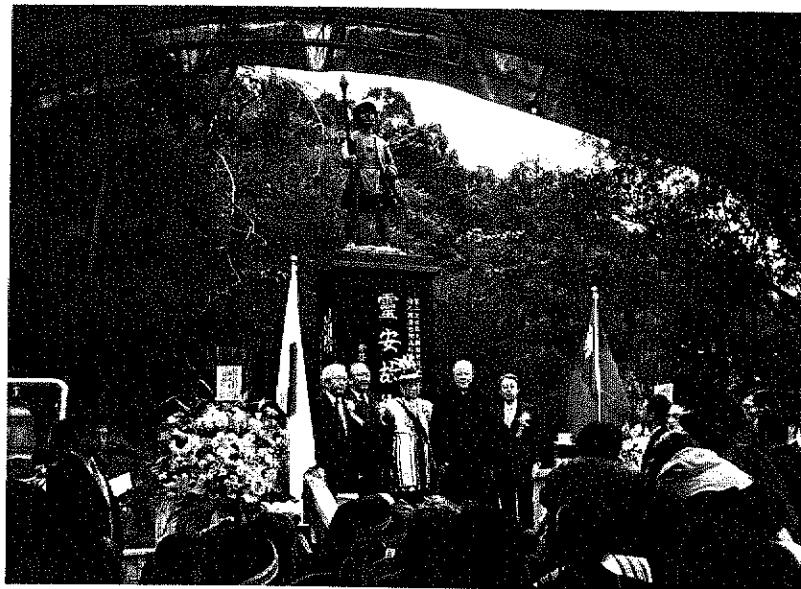


写真6 烏来における高砂義勇隊慰靈碑の移転式

三三九八人から寄付が寄せられたのである。これは一九九九年の九・二一大地震以後の、日本の民間から台湾への寄付の中では最大のものである。この日台双方の交流は、主に戦時中、勇敢さを誇った高砂義勇隊の隊員が、数多くの日本の戦友を救つたことによる。その恩返しとして日本の民間を通じて寄付があつたわけで、人間本来のヒューマニティの表れであり、日本と台湾原住民族の未来へ開かれた平和な交流の土台となるはずであった。

移設式の日の前後には台湾地元各紙が喜ばしいこととして穏やかに報道していた。ところが移設式の一〇日後、原住民選出の某国会議員およびある新聞が突然批判を始めた。烏来が日本に「占領」された、との新聞は第一面のトップで大きく報じたのである。そこでは、あたかも六〇年前の日中戦争時に戻つたように「占領」や当時日本に味方する人へ罵声を浴びせた時に使われた「走狗」という言葉が再び使われ、紙面に批判的心情が滲み出ていた。それと連動して時を置かず、烏来の公園の管理者である台北県政府が県長の指示の下、二月二十四日に「靈安故郷」の慰靈碑主碑を無残にもベニヤ板で覆い、

横にあるその他の慰靈碑をほぼ全面的に撤去するに至った。無論、台湾のほかの新聞やマスコミにおいては歴史学者や人権団体、タイヤル族民族議会、様々な世論が、台北県政府の行動を批判し慰靈碑の存続を呼びかけ、現在は法的手段による解決を図っている。いずれにしても国民党より選出され、また外省人の出自をもつ台北県長の発言や慰靈碑の撤去を求めた国会議員の発言からは、日中戦争および原住民への征服戦争により残つた怨みが鮮明に感じられる。

最後に台湾にとつてもう一つ慰靈と追悼の課題が残っている。台湾には戦前に日本の領地として新天地に憧れた多くの日本人が移住してきていた。彼らは五〇年間の統治期にわたり、すっかり台湾に溶け込んで多くは台湾で骨を埋めるつもりで通婚を始め、二世、三世も台湾で生まれ、立派な家を建て、墓も作ったのである。しかし、一九四五年の敗戦をもつて台湾にいた四〇万の軍民はやむをえず日本に引き揚げる運命となつた。

その後、台北市の三板橋という日本人墓地には、大陸

から来た国共内戦の難民の住家の違法建築が乱立していた。一九九七年によく明石前台湾総督の墓が丁重に遷移され、その後跡地は整備され公園となつた。

また、日本人の引き上げとともに各地の日本寺院も中華民国政府に接收され、そこには日本人墓地は荒れていたが、後にその骨灰は台中の宝覚禅寺などに安置されるようになつた。毎年春、秋に祭祀が行われ、秋の祭祀には日本から仏教僧侶も来て法要を行つてゐる。こうした過程には終戦後に個人で北部と東部を歩き回つて总数八〇〇〇あまりの日本人の遺骨を一つ一つ集めた台湾人がかかわっていた。野沢六和という人であるが、日本人の妻を持ち、野沢家に婿入りした苗栗地方出身の客家人である。

また、太平洋戦争の末期を迎えた時期、台湾の最南端である鵝鑾鼻岬とフィリピン北端のバタン諸島に挟まれるバシー海峡は、日本と南方戦線との輸送パイプであり、南方戦線にとつての生命線であった。そのため戦争末期に至り、日本の制空権が後退するに従い、この海峡を渡る輸送船や護衛艦艇など二〇〇隻あまりの船が撃沈され、

それに乗つていた総数一〇万人以上の日本、台湾、韓国の軍人・軍属および従軍看護婦が、このバシー海峡で命を落としたといわれる。その中の一人であつた中嶋秀次という人が奇跡的に鵝鑾鼻岬の南湾海岸に漂着し、台湾人に救助された。その後、彼は曹洞宗の僧侶とともにこの海岸で法事を行うことによつて、一九八一年によくバシー海峡方面戦没者施設として「潮音精舍」が建設され、一九八八年には寺院としての許可が下りて、「潮音寺」と改名された。それ以来、ことに雨の日に海岸に出没し地元の人々を苦しめていた亡靈が急にいなくなつたと言われている。

なお、終戦末期に鵝鑾鼻岬の東の海上に浮かぶ蘭嶼島にもやはり多くの遺体が漂着した。死靈「アニト」を最も恐れるヤミ族ではあるが、最大限の努力をしてばらばらな遺体を恐る恐る海辺に葬つた、と地元のヤミ族の人々は記憶している。

台湾では多くの民族が先祖を大事にし、死者に対する

畏怖・畏敬の念を共通に持つてゐるが、きわめて多様な慰靈と追悼が行われている。特に「戦後」より残されてきたいくつかの課題は、民族、宗教、政治の各要素が錯綜しており、これを処理するためには、事実に基づいて絡まつた糸を丁寧に解きほぐしていく作業が必要不可欠であろう。慰靈と追悼は時間を経てもまだ行うことがで

きるが、事実の究明には経験者より話を聞くことが大切である。また、その形式は民族、宗教によつてそれぞれ違ひがあるものだが、事実に基づいていなければ、どの時代においても政治に左右されやすいものである。当面、もつとも大事なことは、戦争経験者の話をじっくり聞くことではなかろうか。長い戒厳令で口を封じられてきた人々の話から当時の戦争がどういうものであつたかを突き詰め、そこから生れる反省は、次世代にとつて平和につながる貴い財産となるだろう。だが、時代はもうすでに「戦後」六〇年、戦争を経験した同時代の人々の手によるいわゆる「戦後処理」の一環としての慰靈と追悼の課題が、いよいよ最終段階に差し掛かつてきている。

注

(1) 国家体制の中で四つの民族集團に集約するよう最初に提示したのは許世楷、一九九一年『台湾新憲法論』

(台北・前衛出版社)である。

(2) 一九九六年、内閣の一省庁にあたる「行政院原住民族委員会」が新たに設置され、二〇〇一年には「行政院客家委員会」が設置・運営され始めた。

(3) 客家テレビ局は少し早く二〇〇三年にすでに成立。

(4) 鶴佬人の使用する言語は福建省南部の言葉に由来し、閩南語と呼ばれているが、「台語」(台湾語という意味)と自称してきた。また、戦後の「外省人」というエスニシティの呼称に対し、鶴佬人と客家人は「本省人」とも自称している。

(5) この一二の民族とは、それぞれ北部山地のタイヤル(泰雅)族(その一部は中部山地にも居住)、サイシャツト(賽夏)族、タロコ(太魯閣)族、中部山地のツォウ(鄒)族、ブヌン(布農)族、サオ(邵)族、南部山地のパイワン(排灣)族、ルカイ(魯凱)族、東部沿海地区的アミ(阿美)族、クヴァラン(噶瑪蘭)族、ブユマ(卑南)族、および台東沖の蘭嶼島に住むヤミ/タオ(雅美/達悟)族を指す。なお現在の民族運動の動きに

については、山本春樹他編、二〇〇四年『台湾原住民族の現在』(東京・草風館)参照。

(6) ここでの人口統計、および宗教観念はタロコ族も包含しており、広義のタイヤル族を指している。なお人口統

計は行政院原住民族委員会による二〇〇五年一月三〇日付けの統計による。

(7) 男子は狩猟あるいは首狩に成功したもの、女子は織物ができるものだけが顔に刺青を入れることができた。

(8) パイワン族はラバル系統とブツル系統に分けられ、五年祭は後者のブツル系統だけが執り行う。

(9) 林爽文の反乱は台湾の西部が清朝治下にあつた二〇〇年間で最大規模の反乱事件であった。

(10) 林光華・鍾仁爛他、二〇〇一年『義民心郷土情・褒忠義民廟文史專輯』(新竹・新竹県文化局)、邱彦貴・吳中杰、二〇〇一年『台湾客家地図』(台北・猫頭鷹出版社)

(11) 劉枝萬、一九八三年『中国道教の祭りと信仰』(東京・桜楓社)、林漢泉編、一九八七年『南化鄉慶祝祈安清醮專輯』(台南・南化鄉建醮委員会)参照。

(12) 地方の忠烈祠に祀られる条件は一九九八年に改定され、現在軍関係者のほか、警察や消防士の殉職者、公のために犠牲となつた人、例えは溺れた同級生を救助するために犠牲となつた中学生、二〇〇二年に流行したSARS(重症急性呼吸器症候群)のため、犠牲になつた医療関係者などを祀られている。蔡錦堂、二〇〇三年『台湾の忠烈祠と日本の護国神社・靖國神社との比較』、『台湾の近代と日本』(愛知・中京大学社会科学研究所)参照。

(13) 「行政院国軍退除役官兵輔導委員会」は内閣の一省庁で、注2の「行政院原住民族委員会」や「行政院客家委員会」と同格である。